

Spring Ephemeral

Spring Ephemeral

Spring Ephemeral

Ephemeral

meral

Spring Ephemeral

Spring

春植物を
保全する

Spring

Ephemeral

1 m / 年 vs. 50 m / 年

表紙のお話は、いろいろな本に書いてあることで、より詳しく書いてある本もあり、御存じの方も多いことでしょう。

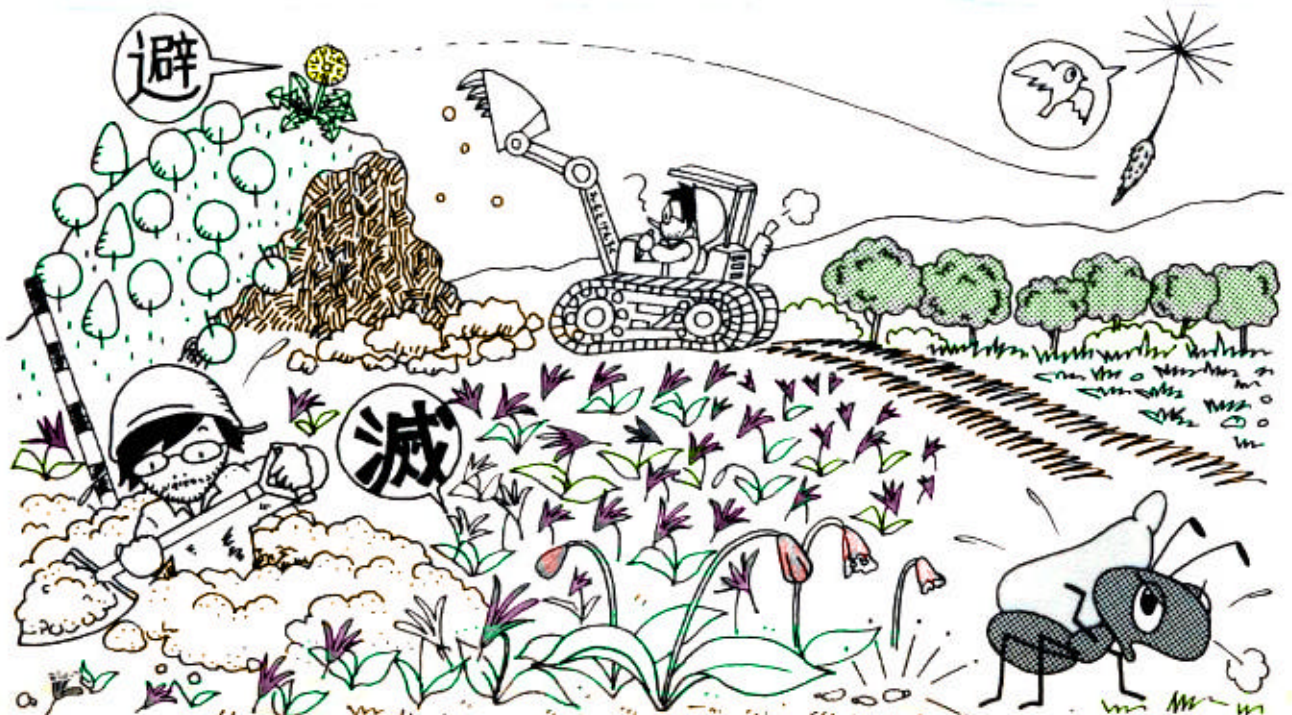
ここでは、さらに踏み込んで、これら春植物個体群の保全の立場からの話を展開してみたいと思います。

春植物の多くは、種子が地面に落ちるか、あるいは落下後にアリによって周囲に運ばれることが知られています。しかし、種子の分散がこうした方法による以上、親植物から種子が離れる距離は、おのずと限られたものとなります。落下した種子全てを、運良くアリが運んでくれたとしても、それは小さな小さなアリさんのこと、空を飛べるわけでもなく、巣からの移動距離も限られているわけですから、種子の移動は、せいぜい数メートルといったところでしょう。

ある本によりますと、カタクリの種子の移動距離は5メートル程度と見積もられています。仮にカタクリが発芽してから開花するまでに5年かかり（これはかなり短めの見積もりですが）、そこから同じように種子が分散されるとすると、カタクリは、毎年1メートルの速度で移動したことになります。

ちょっと極端な例ですが、対照的な例として、タンポポについても考えて

みましょう。カントウタンポポでもセイヨウタンポポでも、種子は風によって運ばれることは、皆さんもよく御存じのことでしょう。かなり少なく見積もった話ですが、ある風の強い日にタンポポの種子が100メートル飛ばされたとします。そして、かなり長めの見積もりですが、その種子が発芽し、花を咲かせたのは2年後のことだったと仮定します。それでも、この例では1年間に50メートルも移動したことになるのです。



『自然を守るとはどういうことか』
守山弘著（人間選書）／農文協
『森を読む』 大場秀章著／岩波書店
『植物の世界』 第1号／教育社
『カタクリの里』
高橋喜平・瀬川強写真集／講談社

上の3冊は、春植物の生態を知り、保全を考える参考におすすめしたい。『カタクリの里』は美しい写真と簡潔な文章でカタクリの魅力伝える好著。

.....カタクリ着花個体数の経年変化.....

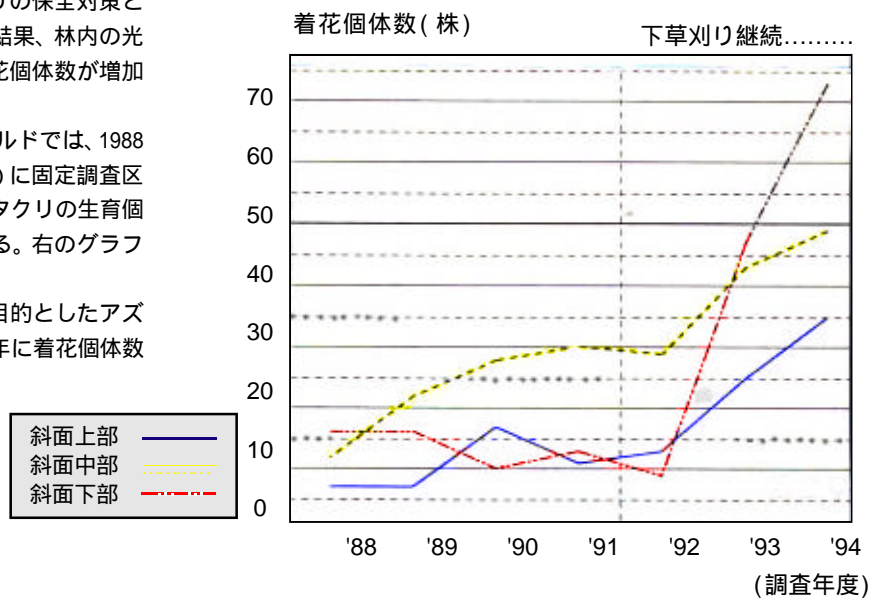
ここでは、代表的な春植物であるカタクリの保全対策として、アズマネザサ等の下草刈りを行った結果、林内の光条件が改善されて生育状況が良くなり、開花個体数が増加した例を紹介する。

右のグラフに示した八王子市内のフィールドでは、1988年から毎年、早春期（3月下旬～4月上旬）に固定調査区（2m四方の正方形の区画）内に生育するカタクリの生育個体数、着花個体数の経年変化を調査している。右のグラフに示したのは、着花個体数である。

'91年の秋から、カタクリ等の保全対策を目的としたアズマネザサ等の下草刈りを継続している。'93年に着花個体数が急激に増加している。これは、

- '91年秋 下草刈りにより光環境改善
- '92年春 生育期に十分な養分を蓄えた
- '93年春 着花個体数急増

という現象が起こったと考えられる。



カタクリをはじめとする多くの春植物の分布拡大がいかにかの「のろい」ものが分かっていただけでしょか。

見方を変えると、分布拡大の速度が遅いということは、狭い範囲に群生しやすく、その生育している場所の環境が悪化した場合、

生育状況の悪化 枯死
個体群全体の絶滅

という結果につながりやすいことに他なりません。分布拡大の速度が速い植物ならば、仮に親が絶えることがあっても、子孫はもっと安全な場所へと避難できるのですが、分布拡大の速度が遅い種である場合、群生している一族全体が一気に滅んでしまいかねないのです。

効果的な保全対策を

現在、都市近郊では下草刈り等の伝統的な管理がなされなくなり、常緑の低木やササ類が旺盛に繁茂しているような雑木林がよく見られます。常緑の低木やササ類が繁茂している状況は、その程度にもよりますが、たださえ年間のうち、わずか数週間しか光合成期間のない春植物にとっては、成長して花を咲かせること以前に、植物体が正常に生きていくうえでも大変な負担になる場合があるのです。こうした状況が原因となって、春植物は減少しており、個体群レベルで絶滅した事例が数多くみられます。もっとも、山野草愛好者の盗掘

によって減少、絶滅する例もないこともないのですが.....。

こうした流れを受け、多くの都道府県、市町村等で「希少植物」や「注目すべき植物」等にあげられ、採集禁止等の保全の措置がとられる例が多くなっているように思われます。

しかし、このような採集禁止等の対策のみでなく、本来の生育環境を復元・創出することにより、現在生存している個体群を保全していくための対策が効果的に実行されている例は少ないというのが現状であり、より一層、真剣に保全対策に取り組んでいくことが私達生物技術者に求められている気がします。

(本社自然環境調査室・根本淳)